

第四章 源典侍の物語 老女との好色事件

[第一段 源典侍の風評]

帝の*御年、ねびさせたまひぬれど(帝は御歳を召しては居らしたが)、かうやうの方(こうした色好みの方面は)、え過ぐさせたまはず(疎かに為されず)、采女(うねめ、給仕女官)、女蔵人(によくらうど、雑務女官)などをも(などでも)、容貌(容姿と)、心あるをば(躰けの優れた者を)、ことにもてはやし思し召したれば(特に選んで側仕えさせ為されていたので)、よしある(見栄えのする)宮仕へ人(女たちが宮廷には)多かるころなり(多く居た今日此頃で御座います)。 *「帝の御歳」については断定できる記述が無さそうだ。ただ源氏はこの歳で十九歳である。そして非公式ながら子を儲けている。他に実子の記述は無いので、一応この若宮を第一子と考えると、源氏自身は二の御子ということで少し後らせて、と言っても別腹なら同時出産でも可能だが、帝が桐壺に源氏を孕ませたのが二十歳過ぎと想定すれば、帝は現在四十歳過ぎくらいの見当に成る。

はかなきことをも(気の向くままに)言ひ触れたまふには(御声を掛ければ)、もて離るることもありがたきに(嫌がることなど有り得ない女房たちに)、目馴るるにやあらむ(慣れ切って居らしたからでしょうか)、「げにぞ(本当に)、あやしう(意外なくらい)好いたまはざめる(手出しなさららない)」と(と言って女房の方から)、試みに(宜しければと)戯れ事を聞こえかかりなどする折あれど(誘い掛けてみる時も在ったが)、情けなからぬほどに(やんわりと)うちいらへて(御断りなつて)、まことには乱れたまはぬを(源氏が本気では心乱されないのを)、「まめやかに(堅苦しくて)さうごうし(物足りない)」と思ひきこゆる人もあり(と言ひ触らす者も居りました)。

年いたう老いたる(歳を*大分とった)*典侍(ないしのすけ)、人もやむごとなく(家柄も良く)、心ばせあり(人柄も良く)、あてに(上品だと)、おぼえ高くはありながら(敬われていながら)、いみじう(並外れた)あだめいたる(多情な)心ざまにて(気性で)、そなたには(その面では)重からぬあるを(腰が軽いのを)、 *注釈に《後文に「五十七、八の人」とある。》とある。 *「典侍」は内侍司(ないしのつかさ)の次官(すけ)である。「内侍司」は《律令制の後宮十二司の一。天皇に近侍して、奏請・伝宣の事にあたり、また、後宮の礼式などをつかさどった。職員は女性で、尚侍(ないしのかみ)・典侍(ないしのすけ)・掌侍(ないしのじょう)・女孀(によじゅ)などがある。(Yahoo 辞書)》とある。典侍は掌侍の命婦より高位の女官。

「かう(こうも)、さだ過ぐるまで(盛りを過ぎてまで)、などさしも乱るらむ(何故あのように淫らになるのだろう)」と、いぶかしくおぼえたまひければ(源氏は不思議に御思いに成つて)、戯れ事言ひ触れて(床遊びを誘つて)試みたまふに(御覧に成ると)、似げなくも思はざりける(年甲斐も無く其の気で応じてきた)。

あさまし、と思しながら(源氏は浅ましいとは思ひながら)、さすがにかかるもをかしうて(さすがにこうした変わった趣向も面白そうなので)、*ものなどのたまひてけれど(枕を交したが)、人の漏り聞かむも(その事を聞き付けた者には)、古めかしきほどなれば(老女相手なので極まり悪さに)、つれなくもてなしたまへるを(源氏は知らない事と答えて居なされたので)、女は(典侍の方は)、いとつらしと思へり(とても悲しがっていた)。 *「ものなどのたまふ」は今の語り手の常套句

とも言うべき濡れ場表現となっている。この言い回しで想起出来る既出の描写は、<簾木の帖>で源氏が強引に空蟬を抱いた時の「例の(いよいよ)、いづこより取る出たまふ言の葉にかあらむ(何処から取り出される言葉なのだろうか)、あはれ知らるばかり(真心熱くして)、情け情けしく(可愛い可愛いと)のたまひ尽くす(口洩らしづめで遂に事果てた)」という場面である。

[第二段 源氏、源典侍と和歌を詠み交わす]

主上の(うへの、帝の)御梳櫛に(みけづりぐし、御整髪に)さぶらひけるを(典侍は従事致していたが)、果てにければ(終わったので)、主上は御桂(みうちき、お召し替え)の人召して(の係りの者を御呼びになって)出でさせたまひぬる*ほどに(着替え用の部屋に出て行かれた後は)、また人もなくて(源氏の他に人が残って居なくて)、*帝は着替え用の部屋へ出て行ったようだが、それでは此処は何処なのか。後涼殿の一室なのか、定まった整髪室が何処かに在ったのか、何の記述も無いので不明。

この内侍(ないし、典侍が)常よりもきよげに(いつもよりも整えた)、様体(ようだい、身なりで)、頭つきなまめきて(髪捌きも艶っぽく)、装束(衣服や)、ありさま(仕種が)、いとはなやかに(とても派手で)好ましげに見ゆるを(誘い掛けている様に見えたので)、

「さも古りがたうも(如何にも若作りで)」と、心づきなく(苦々しく)見たまふものから(御覧に成りながらも)、「いかが思ふらむ(如何いう心算なんだろう)」と、さすがに過ぐしがたくて(さすがに無視しきれず)、裳(も、腰飾り)の裾を引き驚かし給へれば(おどろかしたまへれば、呼び掛けなさんと)、

かはぼりの(扇子の)えならず(ひどく派手な)画きたるを(絵柄のもので)、さし隠して(口を覆って)見返りたるまみ(見返った眼差しは)、いたう見延べたれど(流し目で色っぽく見せようとしているのだろうが)、目皮ら(まかはら、目蓋が)いたく黒み落ち入りて(ひどく黒ずんで弛み)、いみじう(気味悪く)はつれ(髪がほつれて)そそけたり(目に掛かっていた)。

「似つかはしからぬ扇のさまかな」と見たまひて、わが持たまへるに(源氏は自分の扇子と典侍のとを)、さしかへて見たまへば(交換して手にとって御覧に成ると)、赤き紙の(赤い地紙の)、うつるばかり色深きに(照り返すほど濃い色の所に)、木高き森の画を塗り隠したり(小高い森の絵が青く塗付けられていた)。片つ方に(端の所に)、手はいとさだ過ぎたれど(筆跡はとても古めかしいが)、よしなからず(素養は十分俣ばれる字で)、

「*森の下草老いぬれば」など書きすさびたるを(などと恨み言を書き流してあるのを)、「ことしもあれ(異も在ろうに)、うたての心ばへや(宛て付けがましい)」と笑まれながら(と源氏は苦笑いし為されて)、*注釈に«「大荒木森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」(古今集、雑上、八九二、読人しらず)の第二句。年をとって誰も相手にしてくれないといった内容。»とある。「大荒木」は神聖な場所と言う意味で「森」に掛かる歌枕とされる。「アラキ」とは「荒城」または「殯」と表記され«貴人の死体を、墳墓が完成するまで仮に納めて置いたこと。また、その所。おおあらき。かりもがり。もがり。(Yahoo 辞書)»とある。「オオ」は敬いの意で「オオアラキ」の原意は<天皇のアラキ>を指すらしい。ただし、その場所については«もと、大殯(おおあらき)を営む浮田(うきた)の森をいったが、平安以降、場所不詳のまま山城国の歌枕とされた»と、Yahoo 辞書の補説に在った。一説には「浮田の杜」は奈良県五條市今井町の荒木神社、ともあるが、やはり不詳。また「おい

ぬれば」は「古いぬれば(年月が経って)」「下草(雑草が)」「生いぬれば(生い茂れば)」と重ねて読む。歌の大意は「由緒が在っても年老いて見窄らしくなると訪ねる人も世話する人も居ない」という恨み節、だろう。

「*森こそ夏の(荒れ草どころか森は夏の憩い)、と見ゆめる(のように見えますが)」とて、何くれとのたまふも(取り繕って応じなさるが)、 *注釈は《『集成』は「源氏積」所引の「ひまもなく茂りにけりな大荒木森こそ夏の蔭はしるけれ」(出典未詳)を指摘し、「立ち寄ってもよさそうな森ではないか、と、扇の絵の批評にかこつけての皮肉」と注す。『完訳』は「時鳥(ホトトギス)来鳴くを聞けば大荒木森こそ夏の宿りなるらし」(信明集)を指摘し、「典侍の所は多くの男たちがの泊る宿、の寓意で用いた」と注す。》とある。一歌の「森こそ夏の蔭は知るけれ」は<普段は鬱陶しいだけだが>または<普段はそうとは知らないが>、<その森が夏になれば暑い日差しから身を守る御蔭と知る>という言い方。二歌の「森こそ夏の宿りなるらし」は一歌同様に<森が夏の憩いの場となるだろう>とはいうものの、歌の主眼は前節の<初夏を知らせるホトトギスの来鳥で森が賑わっている>情景の方にある。確かに「注」の指摘は肯ける。

似げなく(源氏は老女と自分の取り合わせの不釣り合いを気にして)、人や見つけむと苦しきを(この遣り取りを人に知られるのが嫌だったが)、女はさも思ひたらず(典侍の方はそんな事はお構い無しで)、

「君し来ば手なれの駒に刈り飼はむ、盛り過ぎたる下葉なりとも」(和歌 7-7)

「しっかり御世話申し上げ、しっかり御迎え致します」(意識 7-7)

*原文注釈に《『花鳥余情』は「我が門のひとむら薄(ススキ)刈り飼はむ君が手馴れの駒も来ぬかな」(後撰集、恋二、六一七、小町が姉)を指摘。「君」は源氏をさし、自分を「下葉」に譬える。歓待しようの意。》とある。引歌の表面は「貴方が馬上で訪ねて来るなら馬を労う為に馬草を用意しておきましょう」という言い方で、「家を綺麗に掃除して御訪問をお待ちします」と軽く挨拶したようにも見える。でもこの歌が洒落た言い回しになっているのは、「我が門の(玉門の)ひとむら薄(端下な髪を)刈り飼はむ(刈り揃え)君が手馴れの(君の逞し)駒も来ぬかな(魔羅を迎えん)」と其の儘下種に成っているからだろう。だから適注で、如何にも下葉に拘る典侍らしい。

と言ふさま、こよなく*色めきたり。 *いろんな意味でゾクッとすする表現だが、此処までキワモノ扱いしていいものか。そこそこの地位にある家柄の良い女官ではなかったか。こういう奔放な語り口が如何にも下世話な女房語り風で、当時の女子供、ばかりか今日の男にまでに受ける芸風だろうか。

「笹分けば人やとがめむいつとなく、駒なつくめる森の木隠れ」(和歌 7-8)

「涼む心算が火傷する、何が潜むか森の茂みに」(意識 7-8)

*源氏の防戦振りが見物と言う場面。「笹分けば(誘われて分け入ったら)人やとがめむ(誰かが文句を言うでしょう)いつとなく(今更は)、駒なつくめる(既に誰かが懐いている)森の木隠れ(貴方の寝所には)」と諸歌を踏まえながら返歌した、という所か。

*わづらはしさに(御迷惑でしょうから)」とて、立ちたまふを(源氏が立ち去ろうと為さるのを)、ひかへて(典侍は引き止めて)、 *「煩はし」は<面倒だ>という気持ちだとは思いますが、此処で「面倒だ」と言っ

て打ち切ったとしたら、折角歌を交した情緒が台無しになる。仮にその意味で此処で「わづらはしさに」と実際に言ったとするなら、「今は忙しいから」という言い方しかない。しかし、此処での「わづらはしき」は歌に添えた言葉なので、言い換えるなら歌意を受けていなければ日本語にならない。返歌の大意は「折角のお誘いですが先客が御出でのようなので、失礼します」ということだから、その意を汲めば「わづらはし」は相手が接客で多忙だろうから、と相手の立場を慮った言い方と考えたほうが良さそうだ。だから、＜私などがお邪魔しては、御迷惑でしょうから＞と言い換える。尤も如何言った所で、＜面倒だ＞という源氏の気持ちは相手の女に十分伝わったはずで、それが次の典侍の反応を見せるのだろう。

「まだかかるものをこそ思ひはべらね(今までにこんな仕打ちを受けた覚えはありません)。今さらなる(今更になって)、身の恥になむ(こんな恥を搔こうとは)」とて泣くさま(とって泣き続ける姿は)、いとみじ(実に凄まじい)。

「いま、聞こえむ(また、お便りいたします)。思ひながらぞや(気にしながら居りますから)」とて(と言って源氏が)、引き放ちて出でたまふを(振り切って出て行こうとしなさると)、せめておよびて(典侍は更に縋って)、「*橋柱(はしばしら、掛け放しですか)」と怨みかくるを(と執着を見せているのを)、*「橋柱」については注釈に「源氏が「思ひながら」と言ったことから、「長柄の橋」を連想し、それから「橋柱」と言ったもの。」とある。「長柄の橋」は歌枕で長柄あたりにあった橋。現在の長柄橋付近にあったといわれる(Yahoo 辞書)とある。「長柄」は＜大阪市西部、北区の淀川と新淀川の分岐点の西側一帯の地。孝徳(こうとく)天皇の難波(なにわ)長柄豊碕宮(とよさきのみや)の地と推定されたが、現在では宮跡は大坂城一帯と考えられている。摂津(せつ)の国分寺はこの付近にあった。『古今集』などには「長柄の橋」として多く詠まれている。付近には、繊維、染色、薬品の工場が多い。奈良時代創建と伝えられる古刹(こさつ)の鶴満(かくまん)寺がある。(Yahoo 百科)とある。そして注釈は更に「『源氏積』は「思ふこと昔ながらの橋柱ふりぬる身こそ悲しけれ」(新勅撰集、雑四、一二八五、読人しらず)を指摘。『完訳』も出典を『一条摂政御集』として同歌を指摘し、「嘆老を源氏に訴える」と注す。『集成』は「限りなく思ひながらの橋柱思ひながらに中や絶えなむ」(拾遺集、恋四、八〇四、読人しらず)を引歌として指摘し、「そんなことをおっしゃって、このまま切れてしまおうというおつもりですか」と注す。」とある。何だかんだと言いつつ「なごも詰まりはく遣りつ端(橋)」なのか、という事なのだろうか。それにしても、漢詩・和歌・管絃・歌舞のみならず造園・造築や都市設計、さらには律令制に基く国家管理にまで深い造詣を持つ作者の語りに、「注釈」に頼らなければ少しも読み進むことが出来ない。其れだけに内容が濃いと云えるのだろうが、当時の宮廷人の常識を踏まえたとしても、特に歌については多くの古歌を引用しているので、当時の人たちがさえ幾らかの手引きを要したのではないかと思われる。実際、多くの＜源氏物語＞の＜解説書＞が平安期から著されていたらしいので、この＜物語＞は当初から和歌の教科書としても読まれていたのだろう。優れた文芸がそれ自体で教科書になるのは自明の事ではあるけれど。

主上は御桂果てて(うへはみうちきはてて、帝は着替えを済まされて)、御障子より覗かせたまひけり(障子の隙間から覗いていらっしやいました。そして)。「似つかはしからぬあはひかな(不釣合いな取り合わせだな)」と、いとをかしう思されて(とても可笑しく御思いになって)、

「好き心なしと(色事に淡白すぎると)、常にもて悩むめるを(いつも女房たちが嘆いていたが)、さはいへど(それ程)、過ぐさざりけるは(捨てたものでもないようだな)」とて、笑はせたまへば(お笑いあそばしたので)、内侍は、なままばゆけれど(ばつが悪かったが)、憎からぬ人ゆゑは(好

きな男の為ならば)、濡衣をだに(無実の罪さえ)着まほしがるとぐひもあなればにや(厭わぬものも居るものと)、いたうもあらがひきこえさせず(あえて言い繕いは申し上げなかった)。

人びとも(女房たちも)、「思ひのほかなることかな(意外でした)」と、扱ふめるを(取り沙汰していたが)、頭中将、聞きつけて、「至らぬ隈なき心にて(源氏の女通いは知り尽くしていると思っていたが)、まだ思ひ寄らざりけるよ(是は思い至らなかった所だ)」と思ふに、尽きせぬ好み心も(自分も老女の深情けを)見まほしうなりにければ(試してみたくなくて)、語らひつきにけり(言い寄っては水心を交した)。

この君も(頭の君も)、人よりはいとことなるを(抜群の男ぶりだったが、典侍にとっては)、「かのつれなき人の御慰めに」と思ひつれど(と思ひながら猛りを受け止める有様で)、見まほしきは(本命は)、限りありけるをとや(ただ一人と思っていたとか)。うたての好みや(年増も年増の大年増が、厚かましい好色ぶりだこと)。

[第三段 温明殿付近で密会中、頭中将に発見され脅される]

いたう忍ぶれば(頭の君は典侍との仲を極秘にしていたので)、源氏の君はえ知りたまはず。見つけきこえては(典侍は源氏を宮中でお見かけ申しては)、まづ怨みきこゆるを(必ず逢えない怨み言を言うので)、齡のほどいとほしければ(敬うべき年上の方なので)、慰めむと思せど(意に沿いたいとは思えど)、かなはぬもの憂さに(浴える自信が持てず)、いと久しくなりにけるを(大分久しく逢瀬も無かった頃)。

夕立して、名残涼しき宵のまぎれに、*温明殿(うんめいでん)のわたりを佇み歩き給へば(たたずみありきたまへば、源氏が漫ろに歩いていると)、この内侍、琵琶をいとをかしう弾きみたり。
*「温明殿」は≪平安京内裏十七殿の一。紫宸殿(ししんでん)の北東にあり、神鏡を安置した所。この殿舎に内侍所(ないしどころ)が設けてあった。おんめいでん。(Yahoo 辞書)≫とある。

御前(おまえ、式典)などにも、男方の(をとこがたの、楽士の)御遊びに(演奏に)交じりなどして、ことにまさる人なき上手なれば(特に他を凌ぐ上手だったので)、もの恨めしうおぼえける折から(つれない男を恨んでか)、いとあはれに聞こゆ(情感豊かに響いた。ただ、)。

「*瓜作りになりやしなまし」と、声はいとをかしうて歌ふぞ(典侍が声がとても晴れやかに歌う歌は)、すこし心づきなき(すこし源氏の思いとは違う)。 *この歌は「催馬楽」の<山城>という古歌らしく、大意は「瓜を作っていた渡来人から求婚された日本女性の嬉しくも恥ずかしい気持ちを詠んだ歌(JA 京都やましろ HP)」との事。尤も、「瓜作りになりやしなまし(瓜作りに成ってしまおうか=結婚してしまおうか)」という言葉自体は歌詞の中には無いらしい。それでも、「こゑはいとおかしう」典侍が歌うのは歌の内容には合っているようで、源氏が「すこしこころづきな」く思うのは、声では無く歌の内容という事か。

「*鄂州(がくしゅう)にありけむ(に居たと言う)昔の人も(昔の琵琶奏者も)、かくやをかしかりけむ(こんな風に弾いたのだろうか)」と、耳とまりて聞きたまふ(聞き入りなざる)。 *夕立ち上がりで蒸し暑さも和らいだ内裏の庭に琵琶が聞こえる風情に、源氏は唐の故事を思い出したらしい。注釈には≪(源氏は)『白氏文集』巻第十「夜聞歌者」を連想した。詩中に「鄂州」の文言はないが、古本には題名に「宿鄂州」

と注記があったらしい。》とあるが、「夜聞歌者」について詳しい解説もなく、Web 検索でもヒットしない。「鄂州(オーチャウ)」自体は地名で《中国、湖北(こほく/フーペイ)省南東部の長江(ちょうこう/チャンチヤン)(揚子江(ようすこう/ヤンツーチヤン))南岸にある市。武大鉄道に沿う。人口 102 万 2760 (2000)。秦代に鄂県が置かれ、三国時代の呉(ご)のとき武昌(ぶしょう/ウーチャン)県と改称。(Yahoo 百科)》とある。

弾きやみて(弾き止むと典侍は)、いといたう思ひ乱れたるけはひなり(とても深く思い悩んでいるようだった)。君(源氏の君が)、「*東屋(あづまや)」を忍びやかに(を低く)歌ひて(歌いながら)寄りたまへるに(内侍所に近付いてお寄りになると)、*「東屋」は<催馬楽>にある歌。歌詞は、「東屋(あづまや)の 真屋(まや)のあまりの その雨(あま)そそぎ 我立ち濡れぬ 殿戸(とのど)開かせ 錠(かすが)いも錠(とごし)もあらばこそ その殿戸我鎖さめ おし開いて来ませ 我や人妻」、との事。ざっと、「あづまやの(田舎屋の)まやのあまりの(軒先の)そのあまそそぎ(雨の滴り)われたちぬれぬ(わたしゃずぶ濡れ)とのどひらかせ(戸を開けて中へ入れて御呉れな)かすがいも(誓いも)とごしも(決まりも)あらばこそ(まもるから)そのとのど(外へ締め出して)われささめ(鍵掛けるなんてあんまりな)おしひらいて(どうか戸を開けて)きませ(出て来て御呉れよ)わやひとづま(ねえあんた)」、みたいな感じかな。歌だから言葉遊びなのだが、意味を踏まえて初めて遊べる。考えなくても分かるほどの今日の日常語に通じる言葉使いでもない、と思うが。この<催馬楽>の歌詞は、次の典侍の言葉に繋がるので、必須の教養なのである。というか、当時の読者の常識ではあるのだろう。

「押し開いて来ませ(戸を開けて入って下さい)」と(と典侍が「東屋」という催馬楽の締めめの文句を「出て来ませ」とは逆の意味で)、うち添へたるも(源氏と唱和して来たのも)、例に違ひたる心地ぞする(独特な気の利かせ方に感じる)。

「立ち濡るる人しもあらじ東屋に、うたてもかかる雨そそきかな」(和歌 7-9)

「立ち濡るる人さえ居ない東屋に、表も中も雨そそきかな」(意識 7-9)

*この歌は典侍から源氏への贈歌だが、典侍が求婚される催馬楽を歌った事への宛て付けの様に、源氏が多情な女に締め出しを食った男を演じようとして持ち出した催馬楽の、「東屋」の歌詞を受けているところに趣向が在るので、歌自体の技巧や複雑な思いは感じられず、其れだけに言い換える事で意味の大半は失われる嫌いがある。ともあれ後節の複意だけは見ておくと、「うたても(激しく、情けなくて)かかる(降り掛かる、このように)あまそそきかな(雨ばかりです、泣き濡れています)」となって、この両意の其々が前節の「たちぬるる(悪路をおして訪ね来る)ひとしもあらじ(人さえ居ない)あづまやに(田舎屋に)」に掛かる。

と(と典侍は)、うち嘆くを(恨み嘆くが)、我ひとりしも(源氏は多情な女の恨みを自分一人だけが)聞き負ふまじけれど(負う謂れは無いものと)、「うとましや(宛て付けがましい)、何ごとをかくまでは(何を是程まで拘るのだろう)」と、おぼゆ(と御思いになった)。

「人妻はあなわづらはし東屋の、真屋のあまりも馴れじとぞ思ふ」(和歌 7-10)

「人妻が厚く持て成す東屋の、真屋のあまりも待ち草臥れて」(意識 7-10)

*是は源氏から典侍への答歌だが、贈歌が催馬楽の振りなので此方も同様に「東屋」に託ける事になる。それも無沙汰を恨まれているので、ただ慰めて済むとも思えない。また反論しなければ源氏自身の気持ちも収まらないのだろう。

そこでまた「わづらはし」を出してきた。＜また＞というのは、帝の整髪室での「森の下草」を巡る遣り取りで、典侍が自らを＜荒れて寂しい＞といったのに対して、源氏が＜憩いの場で賑わっている＞と返した場面で、《だから私如きがお邪魔しては、其方が「わづらはし」くなるので、御遠慮します》と言った事の蒸し返しである。此処での「東屋」は「森の下草」と同じ、という訳だ。したがって前節は「ひとづまは(女主人が)あなわづらはし(あたふたと接客に忙しい)あづまやの(田舎屋で)」となる。また此処で、わざわざ「あなわづらはし」という言い方をしたのだから、「あな(穴、女陰の)」「わづらはし(空く隙のない)」という含みは、当然あるだろう。後節は「まやのあまりも(軒先から食み出した行列が)なれじとぞおもふ(落ち着かないので、失礼します)」が主文で、賑わう人ごみは「あまりもなれじ(余り好きじゃない)」のでと駄目を重ねる。実情はともかく、繁盛店の行列に並びたくない気持ちには同感する。

とて(と断って)、うち過ぎなまほしけれど(源氏は通り過ぎたいと御思いだったが、それでは)、「あまりはしたなくや(余りにも失礼か)」と思ひ返して、*人に従へば(典侍が言う通り中にお入りに成って)、すこしはやりかなる(少し興に乗った)戯れ言など言ひかはして(軽口などを言い交わし為されて)、これもめづらしき心地ぞしたまふ(洒落た一時をお過ごしになった)。*「人に従へば」は源氏が鼻歌で歌った催馬楽＜東屋＞のオチの文句の「押し開いて来ませ」に、典侍が調子を合わせて唱和した事を受けている。何が「人に(典侍の方の言い分を)従へば(聞き入れて)」なのかと言えば、部屋の外で「押し開いて来ませ」と言えば＜戸を開けて出て御出で＞だが、部屋の中で「押し開いて来ませ」と言えば＜戸を開けて入って御出で＞という事に成る。で、部屋の中から言った＜典侍の言葉に従って＞、源氏は部屋の中に＜戸を開けて入って御出で＞た、という次第。

頭中将は、この君の(源氏の君が)いたうまめだち過ぐして(とても真面目ぶっていて)、常にもどきたまふが(いつも他人の失敗を笑って御出でなのが)ねたきを(憎らしいので)、つれなくて(澄まし顔で居ても)うち(隠れて)うち忍びたまふかたがた(こっそり忍び通う女たちが)多かめるを(多く居るはずだから)、「いかで見あらはさむ(何とか暴き立てて愚弄ってやろう)」とのみ思ひわたるに(とばかり考え続けていた所)、これを見つけたる心地(二人の遣り取りを盗み見ては尻尾を掴んだ気がして)、いとうれし(とても嬉しかった)。

「かかる折に(この際)、すこし脅しきこえて(少し脅しつけ申して)、御心まどはして(動転させて)、懲りぬやと言はむ(どうだ懲りたかと言って遣りたい)」と思ひて(と頭の君は思って其のまま遠目で)、たゆめきこゆ(二人を油断させていた)。

風冷ややかにうち吹きて、やや更けゆくほどに、すこしまどろむにやと(源氏が少し微睡ろんだ頃かと)見ゆるけしきなれば(見えた様子なので)、やをら入り来るに(頭君は静かに典侍の部屋に入り込むと)、君は(光君は)、解けてしも(安心しては)寝たまはぬ心なれば(眠れない気で居たので)、ふと聞きつけて(物音に気付いて起き上がったが)、この中将とは思ひ寄らず(まさか其れが頭君のものとは思ひ寄らず)、

「なほ忘れがたくすなる(まだ未練がましいと典侍に寝物語で聞かされた)修理大夫(しゅりのかみ)にこそあらめ(に違いない)」と思すに(と御思いになって)、おとなおとなしき人に(大夫の様な年配者に)、かく似げなきふるまひをして(若い自分が老女相手の無様な戯れをしていることを)、見つけられむことは、恥づかしければ、

「あな、*わづらはし(なんて面倒な)。出でなむよ(帰るとしましょう)。*蜘蛛のふるまひは(男が今夜此処へ来る事は)、しるかりつらむものを(分かって居たでしょうに)。心憂く(厭になりますね)、すかしたまひけるよ(当て馬ですか)」 *この「わづらはし」こそは、源氏自らの気持ちで正に<あ面倒くさい>という所。 *「蜘蛛の振る舞ひ」で<男の来訪を知る>という俗信については、例の<雨夜の品定め>で式部丞がニンニク女への捨て台詞に「ささがにの ふるまひしるき ゆふぐれに ひるますぐせと いふがあやなさ(和歌2-8)」と一首詠んでいた。また注釈には≪『源氏積』は「我が背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひ予て知るしも」(古今集、墨滅歌、一一一〇、衣通姫)を指摘。≫とある。ただ之の引歌については、より明瞭な引歌が「やまとうた」Webサイトの<衣通郎姫(そとおひめ)>のページに掲げられている。「わがせこが(私の良い人が)くべきよひなり(来るに違いない夜なの)ささがねの(笹の根の)くものおこなひ(蜘蛛の動きが)こよひしるしも(はっきり知らせているから)」(日本書紀)というもので、<笹の根元に巣を張る蜘蛛が、笹の動き(何かの弾み)で衣に付くと男が訪れる標し、だという中国の俗信>に基く言い回し。「ささがにの」は「ささがねの」と同じ意味で枕詞に用いられるらしく、「ささがに」が<蜘蛛>の事なので故事をより強調した表現なのかもしれないが、「ささがにのくも」は音として<クモのクモ>と重なって「ささがね」の謂れが削られる分、風情より理が勝って心地良くない。いっそ「ささがにのふるまひ」と一言で言い切ってしまうと、まだ増しだが。ともあれ此処までの記述からすれば、典侍が夕暮れに弾いた琵琶は昔馴染みの男を誘い掛けていたのだろう、と源氏は考えた、のだろう。

とて、直衣(なほし、上掛け)ばかりを取りて、屏風のうしろに入りたまひぬ。中将、をかしきを念じて(可笑しさをこらえて)、引きたてまつる屏風のもとに寄りて(引き広げた屏風に近付いて)、ごほごほと(バサバサと)たたみ寄せて、おどろおどろしく騒がすに(わざと大袈裟に大きな音を立てると)、内侍は、ねびたれど(老いたりとはいえ)、いたくよしばみなよびたる人の(色気たっぷりの柳腰で)、先々もかやうにて(以前にも同様の痴話騒動で)、心動かす折々ありければ(身の縮む思いを度々していたので)、ならひて(馴れていて)、いみじく心あわたたしきにも(大変な動悸の早さだったが)、「この君をいかにしきこえぬるか(押し掛けて来た男は光君を如何しようというのか)」とわびしさに(と気を揉んで)、ふるふふるふ(ブルブル震えながらも)つとひかへたり(じっと腰をすえている)。

「誰れと知られで出でなばや(正体を知られない内に逃げ出そう)」と思せど(と源氏は御思いになったが)、しどけなき姿にて(だらしない寝姿で)、冠(かうぶり、被り物)などうちゆがめて走らむ(などを丸め込んで逃げ走る)うしろで思ふに(後姿を想像すると)、「いとをこなるべし(ひどい醜態だ)」と、思しやすらふ(と思いつまった)。

中将、「いかで我と知られきこえじ(決して正体を知られまい)」と思ひて、ものも言はず、ただいみじう怒れるけしきにもてなして、太刀を引き抜けば、女、「あが君、あが君(あなた様、どうかお止め下さい)」と、向ひて手をするに(中将に向かって手を合わせるので)、ほとんど笑ひぬべし(思わず噴出しそうになってしまった)。

好まじう(上手いこと)若やぎて(若作りして)もてなしたる(拵えた)うはべこそ(外見は)、さてもありけれ(それなりではあったが)、五十七、八の人の、うちとけて(地のままで)もの言ひ騒げるけはひ(慌てふためく典侍の姿は)、えならぬ(稀に見る美貌の)二十の若人たちの御なかにて(二十歳代の若者に挟まれて)もの怖ぢしたる(怯えていて)、いとつきなし(ひどく見窄らしい)。

かうあらぬさまにもてひがめて(このように頭君が別人を装って)、恐ろしげなるけしきを見すれど(嚇し掛ける振りをして見せても)、なかなか(寧ろ其の態とらしきから)しるく(正体をはっきりと)見つけたまひて(お知りになつて)、「我と知りて、ことさらにするなりけり(殊更大袈裟な芝居をして)」と、をこになりぬ(と源氏は馬鹿らしく御思いになった)。

「その人なめり(間違いない)」と見たまふに(と源氏は男の正体を見破り為されると)、いとをかしければ(面白半分)、太刀抜きたる腕(かひな、二の腕)をとらへて(を掴んで)、いといたうつみたまへれば(思い切りつねり為さると)、ねたきものから(頭君も暴露してしまったかと)、え堪へで笑ひぬ(堪え切れずに笑ってしまった)。

「まことは(全く)、現し心か(とよ)うつし(とよ)ころか(とよ)よ、正気の沙汰(か)よ。戯れにくし(や)冗談にも程(あ)る。いで(一寸)待つて、この直衣着(む)上着(を着る)から)」とのたまへど(と源氏が言いな(さ)つても)、つととらへて(頭君はじつと光君の手を引き寄せたまま)、さらに許(し)きこえず(一向に離さない)。

「さらば(じゃ)い(っ)そ)、もろ(と)もに(と)こそ(其方も一緒に)」とて(と(い)つて光君が)、中將の帯をひき解きて脱(が)せたまへば、脱(が)じとすま(ふ)を(頭君は脱(が)されまいとして)、とかく(互いに)ひき(し)ろ(ふ)ほどに(引(っ)張(り)合(う)うちに)、ほ(こ)ろ(び)は(縫(い)目(が))ほ(ろ)ほ(ろ)と絶(え)ぬ(解(け)て袖(が)取(れ)てしまった)。中將、

「つつむめる名や漏り出でむ引きかはし、かくほころぶる中の衣に (和歌 7-11)

「ひた隠す名も袖越しに引き千切れ、綻び見える衣諸共 (意識 7-11)

*この歌は<綻んだ衣>に<名声の綻び>を擬える趣向なので、「つつめむる」「ほころぶる」と<衣>に纏わる言葉を選んで詠んである。特に目を引くのは「ひきかはし」で、<袖口に表地を用いる仕立て方>をいうらしく、「つつめむるなや(隠した名が)」「ひきかはし(引き返し、打って変わって)」「もりいでむ(露見した事)」を<破れた袖>で受ける事で、後節の「かくほころぶるなかのころもに(このように破れてしまっている衣から典侍との仲が露見してしまった)」という<衣>を生かしている。

上に取り着ば(是を着て歩けば)、しる(し)からむ(すべて露見してしましますよ)」と言ふ。君、

「隠れなきものと知る知る夏衣、着たるを薄き心とぞ見る」(和歌 7-12)

「出し抜く筈の夏衣、さすがに薄い出来心」(意識 7-12)

*此处での源氏の気持ちは頭君の婉曲な歌に対してよりも、挑発的な「しる(し)からむ」に対する反発が強かったと思う。「上に取り着ば」というが、そんな見(っ)とも無(い)い格好で歩けるものなら歩いてみろ、と言いたい気持ち。そう考えてこの歌を見ないと意味が分からない。「なつ(ご)ろ(も)」は<袖のもげた服>で、「しる(し)る」という面白(い)そうな言い方も<知る(痴)る>なのだろう。即ち、「隠れ(無)き物と知る」は<隠(し)事(を)を暴(く)心算(で)>であり<肌(を)を隠(せ)ない>。「痴(る)夏衣」は<破れ(易)い服(で)>であり<は(し)た(な)い薄(い)衣(を)>。「きたる(を)」は<遣(っ)て来(た)のは>であり<着(る)のは>。「う

すきこころとぞ」は<心無い事だと>であり<あさはかだと>。是等を重ね読んで「見る(思う)」。通せば、「隠し事を暴こうと軽装で遣って来た君は心無いと思うが、破れた服を着て行こうとするのは更に情けない」、という嫌味。

と言ひかはして(と言い返して)、うらやみなき(妬み様も無い)しどけな姿に引きなされて(乱れ姿に引き落とし為され合って)、みな出でたまひぬ(揃って部屋をお出に成りました)。

[第四段 翌日、源氏と頭中将と宮中で応酬しあう]

君は(光君は)、「いと口惜しく(実に見つとも無い所を)見つけられぬること(見つけられてしまったものだ)」と思ひ、臥したまへり(不貞腐れて臥されていた)。内侍は、あさましくおぼえければ(後始末に気を揉んで)、落ちとまれる御指貫(源氏が脱ぎ捨てて行った袴や)、帯など、つとめて(翌朝になって)たてまつれり(お届け致した)。

「恨みてもいふかひぞなきたちかさね、引きてかへりし波のなごりに (和歌 7-13)

「お忘れ下さい鞆当は、私はお名残惜しいけど (意識 7-13)

*忘れ物を「引きてかへりし波のなごりに(引き潮の浜に残った)」「浦見ても云ふ貝ぞなき立ち重ね(幾度かざっと見渡して是以外は無いと目に付いた貝)」に見立てて、届け物に添えた歌。本意は「引きてかへりし波のなごりに(お帰りに成ったら後腐れなく)」「恨みても言ふ甲斐ぞ無き太刀重ね(恨んでみても始まらない争いですから)」だろう。

*底もあらはに(これまででしょうか)」とあり。 *「底も頭に(底まで見えて)」は「立ち重ね」た「波のなごりに」砂上の楼閣が崩れた、という言い方。詰まりは典侍が、源氏に頭君との仲がばれてしまったので、愛想を尽かされてしまうと思って、探りを入れたという所なのだろう。

「面無の様や(おもなのさまや、臆面も無く厚かましい)」と見たまふも憎けれど(と源氏は手紙を見るのも癪に障ったが)、わりなしと思へりしも(典侍が始末に困っている様子も)さすがにて(さすがに窺えて)、

「荒らだちし波に心は騒がねど、寄せけむ磯をいかが恨みぬ」(和歌 7-14)

「荒ら立つ浪の高さより、険しい岩が目立つ瀬戸際」(意識 7-14)

とのみなむありける(とだけ詠んで返書為された)。

帯は、中将のなりけり(帯は中将の物だった)。わが御直衣よりは色深し(自分の直衣よりは色が濃い)、と見たまふに(と見比べて御出でに成ると、自分の直衣の)、端袖(はたそで、片方の袖)もなかりけり(が無くなっていた)。

「あやしのことどもや(ちっとも気付かなかった)。おり立ちて乱るる人は(夢中になって争っている)、むべ(なるほどこうした)をこがましきことは多からむ(馬鹿げた事が多くあるのだろう)」と、いとど御心をさめられたまふ(しみじみ反省しなさる)。

中将、宿直所より、「これ、まづ綴ぢ付けさせ給へ(とちつけさせたまへ、付け直させ為されませ)」とて、おし包みておこせたるを(源氏の端袖を包んで遣してきたのを)、「いかで取りつらむ(どう遣って取って行ったのだろう)」と、心やまし(光君は口惜しかった。そして、)。「この帯を得ざらましかば(この帯を手に入れていなかったら、言われっ放しだった)」と思す(と早速仕返しを思い付かれた)。その色の紙に包みて(帯を同色の紙に包んで)、

「なか絶えば託とや負ふと危ふさに、はなだの帯を取りてだに見ず」(和歌 7-15)

「肌身離さずこの花田、はなはだ大事に為されませ」(意識 7-15)

*原文注釈に《源氏の贈歌。『花鳥余情』は『催馬楽』「石川」の「石川の高麗人に(いしかはのこまうどに)帯を取られて(おびをとられて)辛き悔する(からきくいする) いかなるいかなる帯ぞ 縹の帯の(はなだのおびの) 中は絶いれるか かやるかあやるか 中は絶いれたるか」を指摘。「中」は頭中将と源典侍との仲をさす。仲の切れた原因がわたしにあると言われぬように、帯は取りませんよの意。》とある。当時「石川の高麗人」と言えば、<特定の人物>か<一定の勢力>を指したのかも知れない。其れが分からないので「はなだ(縹、花田)の帯」の面白味が分からない。ただ「はなだいろ」については、ほぼ<水色>で実際には堅牢な薄い藍染だったらしいが、原義は<つゆくさ>の花の青で染めた色で非常に褪色し易く、<心移り>にも喩えられた色らしい。また「なかつたえ(中絶え)」は<恋の終わり>との事。ということで残念ながら情感はつかめないが理屈では「なかつたえ(君と内侍との仲が途絶えるとしたら)かことやおふと(その責を負うのを=私の所為にされるのを)あやふさに(避けるために)はなだのおびを(この縹色の帯を)とりてだにみず(手に取って見たりはしません、だからさっさと御返します)」と言う所。分かったのは、頭君の帯が花田色だった、という事。

とて(と一言添えて)、やりたまふ(帯を中将に送り付けなさる)。立ち返り(すると直ぐ頭君からの返事が)、

「君にかく引き取られぬる帯なれば、かくて絶えぬるなかとかこたむ (和歌 7-16)

「君が持ってた帯だから、君の所為以外在り得ない (意識 7-16)

え逃れさせたまはじ(言い逃れはさせません)」とあり。

日たけて(勤務時間となって)、おのおの殿上に参りたまへり(それぞれ御所表の持ち場にお付きになった)。いと静かに(ごく整然と)、もの遠きさましておはするに(光君は素知らぬ顔で仕事を居らして)、頭の君もいとをかしけれど(頭君も本当は可笑しかったが)、公事(おほやげごと)多く奏し(多くの議事を奏上し帝の決裁を仰ぎて)くださ(公に宣下する)日にて、いとうるはしくすく(しっかり型に則って)よかなるを見るも(律儀に努めながらも)、かたみにほほ笑まる(目が合えば符と微笑まれる)。人まにさし寄りて(他人が居なくなった隙を見て中将が)、

「もの隠しは懲りぬらむかし(隠し事は懲りたでしょう)」とて(と言って)、いとねたげなるしり目なり(如何にも憎らしい流し目を源氏に向けた。すると源氏は、)。

「などでか(別に)、さしもあらむ(そんな事はありません)。立ちながら(折角来たのに其の儘) 帰りけむ人こそ(帰ってしまった人こそ)、いとほしけれ(実にお気の毒)。まことは憂しや(全く以って儘ならないのが)、世の中よ(男女の仲ですね)」と言ひあはせて(と言い返して)、「*鳥籠の山なる」と、かたみに口がたむ(互いに口止めし合った)。*注釈に《『源氏積』は「犬上の(いぬかみの)鳥籠の山なる(おこのやまなる)不知哉川(いさやがは)不知と答えよ(いさとこたへよ)我が名洩らすな(わがなもらすな)」(古今集、墨滅歌、一一〇八)を指摘。》とある。「犬上」は《滋賀県中東部の郡名、河川名。犬上郡は近江(おうみ)十二郡の一つ。『万葉集』には狗上、『和名抄(わみょうしょう)』では犬上と書く。(Yahoo 百科)》とある。情景としては「近江の女の所に通う男が川辺に佇み瀬音を聞きながらワケアリの情緒に浸る」イヤラシサ、なのだろう。「色がらみの口裏あわせ」の意味合い。

さて、そののち、ともすればことのついでごとに、言ひ迎ふる(頭君がこの件を持ち出して) くさはひなるを(話の種にしたので)、いとどものむつかしき人ゆゑと(光君は典侍を何と始末の悪い人だろうか)と、思し知るべし(御思い知る事になるのです)。女は(だというのに典侍は女気取りで)、なほいと艶に怨みかくるを(何時までも色目で迫ってきたので)、わびしと思ひありきたまふ(光君は困って逃げ回りなさる)。

中将は、妹の君にも(光君の正妻なる自分の妹君にも)聞こえ出でず(言い付けはせず)、ただ、「さるべき折の脅しぐさにせむ(何かの時の押さえ材料にしよう)」とぞ思ひける(というように思っていた)。やむごとなき御腹々の親王たちだに(同じ帝の御子の御兄弟たちでさえ)、主上の御もてなしのこよなきに(光君への御寵愛振りの格別さに)わづらはしがりて(畏れ入って)、いとことにさり(光君だけは別格だと)きこえたまへるを(御思いのようで居らしたのに)、この中将は、「さらにおし消たれきこえじ(決して退けを取るものか)」と、はかなきことにつけても(些細な事でも)、思ひいどみ(張り合っ)てきこえたまふ(見せ為さる)。

この君一人ぞ(この頭君だけが)、姫君の御一つ腹なりける(姫君と同じ母を持っていた)。帝の御子といふばかりにこそあれ(光君は帝の御子ではあるが)、我も、同じ大臣と聞こゆれど(自分も大臣の子なので)、御おぼえことなるが(父は帝ではないが)、皇女腹にて(帝の妹君を母として)またなくかしづかれたるは(この上なく大事に育てられたからは)、何ばかり劣るべき際と(少しは劣る身分だと)、おぼえたまはぬなるべし(御思いになる事はなった)。

人がらも(人となりも)、あるべき限りとのひて(豊かな才能に恵まれて)、何ごともあらまほしく(どの面も理想的で)、たらひてぞ(十分な資質を)ものしたまひける(備えて居らした)。この御中どもの挑みこそ(この御二方の競争は)、あやしかりしか(並外れた素晴らしさで目を見張る者が御座いました)。されど、うるさくてなむ(ですが其れは、まあ宜しいでしょう)。